

<研究ノート>

ゲオルク・ミッシュの自叙伝史研究（1）

小松 進*

Historical Studies of Autobiographies by Georg Misch (1)

Susumu KOMATSU *

1. 問題の所在

今日の欧米諸国において自叙伝に関する批判的・学問的研究が活況を呈する契機の一つとなったのが、ドイツの哲学者ヴィルヘルム・ディルタイ（Wilhelm Dilthey 1833～1911年）の思想であったことは、よく指摘されるところである¹⁾。自然科学とその方法論が一世を風靡し人類の知的・学問的領域のすべてを支配しつつあるかに見えた19世紀後半から20世紀初頭にかけて、ディルタイは自然科学とは異なる精神科学の独自性を主張し、それに哲学的な基礎づけを与えることを終生の課題とした。その作業の過程で、ディルタイの思索の焦点は、自然世界とは異なる人間の世界に固有な世界、すなわち生へと向けられていく。かくして、ディルタイは20世紀のドイツ思想界において一大潮流となる生の哲学の創唱者となった。そのディルタイが最晩年に辿りついたのが、生を理解する手がかりとして自叙伝が持つ意義への着目である。「自叙伝はわれわれに生を理解させてくれる最高にして最も示唆に富む形態である²⁾」という、ディルタイが自叙伝に与えた高い評価こそ、

現代において自叙伝への関心を高める端緒の一つとなった。そして、こうしたディルタイの思想を受け継ぎ、具体的な自叙伝研究に画期的な成果をあげたのがゲオルク・ミッシュ（Georg Misch 1878～1965年）である。

ミッシュはディルタイの女婿にして高弟であり、『ディルタイ全集』の編集に携わりながら、ディルタイ哲学の精髓を広く巷間に紹介するのに寄与した。ミッシュ自身も哲学者として『生の哲学と現象学』（*Lebensphilosophie und Phänomenologie*）や『生の哲学にもとづく論理学の構成』（*Der Aufbau der Logik auf dem Boden der Philosophie des Lebens*）などを著わし、フッサールやハイデガーの思想と対決しながら生の哲学の系譜をひく哲学者としてドイツの思想界に独自の地歩を占めている。しかし、こうした哲学的営為のかたわら、ミッシュがライフワークとして心血を注ぎ人生の最も多くの歳月を捧げたのは自叙伝の研究であった。その研究の成果として今日の我々に遺されたのが、一人の人間による自叙伝の研究としてはおそらく空前にして絶後と言ってよい壮大な記念碑的大著『自叙伝の歴史』（*Geschichte der Autobiographie*）であ

* 情報コミュニケーション学部国際交流学科、Tsukuba Gakuin University

る。その第1巻は1907年に上梓され、ミッシュの死後に残された遺稿が最終巻として刊行されたのは1969年である。研究と執筆は60年あまりに及び、ミッシュの人生はまさに自叙伝の研究とともにあったとも言える。

ミッシュの『自叙伝の歴史』は、ヨーロッパにおける自叙伝研究の金字塔として、今日燦然と輝きを放っている。自叙伝の研究を志す者なら、必読の文献として一度は繙き、まずは研究の出発点としなければならないであろう。しかし、わが国においては、この大著が広く世に紹介され、学問的な研究の俎上に載せられることはほとんどないと思われる。本稿で試みるのは、この歴史的大著の全貌を明らかにし、その内容を吟味しながら、自叙伝研究の、とりわけその歴史的研究の問題点を探ることである。ところで、『自叙伝の歴史』は4巻4000頁あまりの浩瀚な書であり、扱われる範囲も古代オリエントから19世のゲーテの時代にまで及ぶ。さながら、自叙伝を介して鳥瞰されたヨーロッパ精神史の叙述ともなっている。今回取り上げるのは、こうした長大な歴史叙述の前提をなすもの、つまり、自叙伝を扱う際にミッシュが採る基本的な立脚点である。そもそもいかなる文書群を自叙伝と規定するのか、いかなる視点、どんな意図で自叙伝の歴史を描くのか、どんな観点から自叙伝を分析するのか。『自叙伝の歴史』の冒頭に置かれた「自叙伝の概念と起源」を読み解きながら、こうした諸問題に対するミッシュの基本的立場に検討を加えることを本稿の課題としたい。

2. デルタイ哲学における自叙伝の意味

ミッシュは生の哲学の継承者として、デルタイの思想から多大な影響を受けた。自叙伝研究においても同様である。ミッシュの自叙伝研究はデルタイの晩年の思想に触発され、『自叙伝の歴史』のそこかしこにデル

タイの思想の影響を読み取ることができる。したがって、自叙伝に関するミッシュの研究に入る前に、デルタイ哲学、とりわけ、その哲学における自叙伝の意味を検討することは、本研究に必要な前提となるであろう。この問題に関し、筆者はすでに別稿の「デルタイと自叙伝」で詳しく論じたことがある³⁾。ここでは、そこで論じたことを整理し、本稿の課題への出発点としよう。

自然科学から精神科学を区別し、精神科学の本質を闡明するとともにその学問的方法論を確立すること、これがデルタイ哲学を貫く主要課題の一つであった。そのデルタイにとって、両科学を決定的に分かつのは、その対象が体験しうるか否かという点である。

自然科学は人間の直接的な自然体験を排除し、空間、時間、量、運動の関係に基づく抽象的な把握によって、自然の世界を法則的秩序として構成するところに成立する。だから、自然科学で扱う自然世界とは、実在ではなく、抽象に過ぎないのである。それに対し、精神科学が対象とするのは、人間が現実体験しうるもの、それら体験しうるものが連関をなしている世界である。この世界こそ人間に固有な現実であり、デルタイはそれを「生」と呼ぶ。

したがって、この生を把握することが精神諸科学に共通な課題であり、それら諸科学が直接に対象とするのは、さまざまな「生の表出」(Lebensäußerung)もしくは「生の客観態」(Objektivierung des Lebens)である。生それ自体は感覚によって把握されえないが、その外的な現象として感覚に与えられるのが「生の表出」「生の客観態」である。たとえば、言語、身振りや作法、あらゆる種類の芸術作品、宗教や哲学、法や制度、さらには国家など人間世界のさまざまな現象がそれに含まれる。これら感覚に与えられたさまざまな外的現象の背後にあってそれらを生み出したもの(=精神)を把握することが、精神諸科学に

固有な課題なのである。そして、外なる現象から内なる精神を捉えようとする行為を、デイルタイは理解（Verstehen）、もしくは省察（Besinnung）と呼ぶ。理解とは、さまざまな「生の表出」に自己の体験を移入（追体験）することによってその「生の表出」の内なるものに迫っていく行為で、こうした行為こそ精神科学に独自の学問的方法となる。かくて、「生」、「体験」、「表現（生の表出）」、「理解」の連関にもとづき人間及び人間世界を把握する科学と、デイルタイは精神科学を規定する。

自叙伝も「生の表出」の一形態であるが、自叙伝が特殊なのは、「生の表出」を生み出す者と「理解」する者とが同一人物であるという点である。自叙伝に綴られる諸体験はそれを綴る語り手自身の体験であり、「理解」のあり方が他者の体験に自己の体験を移入するという通常の「理解」と全く異なっている。しかも、自叙伝においては、諸体験を取捨選択し選択された体験に連関を与える者が、人生のさまざまな局面において、過去に人生の意味を探り、未来に人生の目的を定めることによって、人生の連関の形成に直接関わって来たのである。「理解」する主体と「理解」される客体の一致。こうした「理解」の特殊なあり方こそ、デイルタイが自叙伝に格別高い評価を与えた理由である。

ところで、このように「生に対する省察の最も直接的な表現」⁴⁾として自叙伝に格別な意味を与えたにもかかわらず、デイルタイは自叙伝そのものの研究に進もうとはしなかった。「自叙伝はわれわれに生を理解させてくれる最高にして最も示唆に富む形態である」という表現からも窺えるように、デイルタイにとって、自叙伝は生を理解するための最も有効な手がかりであり、わけても、「生の諸範疇」（Kategorien des Lebens）を導き出すために最適な形態だったのである。この点については以前に触れることがなかったので、こ

こで補足しておきたい。

遺稿の『精神諸科学における歴史的世界の構成に関する続編草案』において、デイルタイは具体的に自叙伝の代表作をいくつか挙げながら、それらと「生の諸範疇」との関連について言及している。デイルタイにとって、範疇とは「さまざまな対象を把握する仕方を表わす概念」⁵⁾であり、だから、「生の諸範疇」とは生を把握するために用いられる諸概念である。この「生の諸範疇」を導き出すためにデイルタイが考察の対象にするのは、アウグスティヌスの『告白』、ルソーの『告白』、ゲーテの『詩と真実』というヨーロッパにおける典型的な自叙伝である。

これら3作品からデイルタイが抽出する「生の範疇」は、「意味」（Bedeutung）、「目的」（Zweck）、「価値」（Wert）、「発展」（Entwicklung）である。「意味」とは、「生の諸部分の全体に対する関係」⁶⁾であり、ある特定の個人の人生——デイルタイはこれを「生の過程」と呼ぶ——が問題となるならば、その人が「生の過程」（＝人生）で味わった一つ一つの体験が「生の過程」（＝人生）全体に対して持つ関係である。生の流れの連関はこの「意味」の範疇によって把握されるのであり、また、個人の断片的な諸体験を結び合わせてそれをまとまりある一つの人生として理解させてくれるのも「意味」の範疇によってである。ところで、こうした「意味」が獲得されるのは過ぎ去った生の経過を見渡すことのできる想起においてであり、したがって、生の全体の究極の「意味」が最終的に確定されるのは、生の終焉、つまり人間世界＝歴史の終局を待たなければならず、また、自分の人生の真の意味が判明するのは死の瞬間である⁷⁾。歴史の終焉も死の瞬間も現実には体験し記述されえないのだから、「意味」は過去を振り返る時点での暫定的な「意味」に過ぎず、時間の経過とともに変化していくことになる。過去を振り返る際に現われる範疇が

「意味」であるのに対し、未来に目を向ける際に現われる範疇が「目的」である。「目的」は未来における計画を設定する意志によって生の流れを固定し方向づけるものであり、生の連関を「形成」(Gestaltung) という視点から把握する範疇である⁸⁾。「価値」は、生の経過の中で出会うさまざまな形象に対してとる態度のありようを抽象的に表現したものである。こうした態度には、たとえば、快、好ましさ、是認、満足などのような積極的態度、もしくはその反対の消極的態度があり、そうした態度を引き起こした対象は感情というかたちで記憶されるが、思考はその記憶から感情を引き離し、概念としてその対象を捉え直す。このように生のただ中で取るさまざまな態度が思考によって概念化されたものが「価値」なのである⁹⁾。生の連関を動態面から捉えた範疇が、「発展」である。個々人の生は、それ自身の内部にある限界と、外部からの圧力によって生じる制約に、絶えず晒されている。こうした制限を克服して新しい状況へ前進する過程が、「発展」である。ただし、この「発展」は、常に高い状態への前進、すなわち進歩となるわけではない。その反対に下方への前進(後退)もありうるからだ¹⁰⁾。

ディルタイは自叙伝からこうした「生の諸範疇」を取り出し、これらの諸範疇を組み合わせるかたちで個々の自叙伝の構造を考察する。たとえば、アウグスティヌスの『告白』において、その生涯の諸部分を結合し「意味」ある連関とするのは、アウグスティヌスの回心という出来事である。この回心こそ絶対的な「価値」にして最高善であり、この出来事に先立つすべての出来事は、この「目的」へ向かう途上の宿駅に過ぎない。つまり、アウグスティヌスの『告白』の核心をなすのは、生涯の各部分が回心という絶対的な「価値」の実現に対して持つ関係であると、ディルタイは総括する¹¹⁾。一方、ルソーの

『告白』の中にディルタイが読み取るのは、ルソーが自分を気高くして高貴な魂と自覚し、それを世間に認めさせたいという意図である。気高くして高貴な魂はルソーの生きた時代の理想、最高の「価値」であり、『告白』に描かれるのは屈辱と誤解に晒されながらもこの理想を実現しようと努力するルソー自身の姿なのである。こうした理想の実現こそ人生の「意味」であり、この「意味」にもとづいて人生が解釈され、自分の個性的存在の権利が主張されているところに、ディルタイはルソーの『告白』の本質を見ている¹²⁾。最後に、ゲーテの『詩と真実』において、ディルタイはアウグスティヌスとルソーには見られなかった新しい「生の範疇」、すなわち、「発展」という概念が出現するのを見て取る。生の瞬間=現在は、ゲーテにとって、二重の側面を持つ。過去に規定された過去の生の充実という側面と、未来に働きかけ未来を形成する影響力という側面である。このように生の連関を「発展」と捉えるところに、ディルタイはゲーテの新しさと独自性を感じる¹³⁾。

ディルタイが「生の諸範疇」として挙げるのは、「意味」、「目的」、「価値」、「発展」の四つに止まらない。しかし、ディルタイにとって、これらの範疇こそ生の把握に最も有効な概念であり、自叙伝はこうした範疇を引き出すのに絶好の素材なのである。それと同時に、その構造をこれら諸範疇の相互作用から説明するところに、ディルタイによる自叙伝分析の特徴がある。こうしたディルタイの考察を引き継ぎ、それを自叙伝に関する本格的な歴史研究へて発展させたのがミッシュである。

3. 自叙伝の定義

自叙伝もしくは自叙伝的文書は、歴史上、多種多様な表現形態をとって現われた。たとえば、記念碑の碑文、公衆を前にしての弁論

や演説、宗教的な祈りや懺悔というかたちをとる場合もあれば、あるいは、知人に宛てた書簡、子孫に与える教訓、宮廷生活を綴った回想録、政治的な意図を持った宣伝文書などの中に現われることもある。このような種々雑多な文書群を包括し、他の文学ジャンルから区別された独自の文学形態として自叙伝を定義することは、自叙伝研究における主要課題の一つである。近年においてこうした自叙伝の定義を試みた代表的な研究が、フィリップ・ルジュンヌ（Philippe Lejeune）の『自伝契約』（Le Pacte autobiographique）である。ところが、ルジュンヌが研究対象とするのは、ルソーが『告白』を完成させた1770年以降の作品であり、それ以前の文書群に自分の定義を適用するのは不適格であると断わっている¹⁴）。近代以前の自叙伝的文書群があまりにも多種多様で、それらに包括的な定義を与えることは困難ということであろう。しかし、ミッシュの扱うのは19世紀に到る主として近代以前の自叙伝的文書であり、自叙伝の歴史を構想するなら、ミッシュは自叙伝として扱う対象の範囲をあらかじめ明確にしておく必要がある。こうした自叙伝の定義に関し、ミッシュはいかなる視点を提示しているであろうか。

すでに *Autobiographie* という言葉のうちに、ミッシュは自叙伝の本質を規定する手がかりを見出す。これはある個人の生（*bios*）の自分自身（*auto*）による記述（*graphia*）を意味する表現で、ギリシア語をもとにして作られた造語である。誰によってこの造語が生み出されたのかは定かではなく、18世紀末にドイツ文学の中に最初に現われ、続いてイギリスに伝播し、19世紀には文学の世界で広く一般に使用されるようになったらしい¹⁵）。このように *Autobiographie* という表現は比較的新しく流布するようになった人工的な学術用語であるにもかかわらず、ミッシュはこの用語こそ長らく変幻自在な姿をとってきた自

叙伝的文書群を包括する簡潔で明確な概念的表現と見なすのである¹⁶）。

Autobiographie という表現のうちに自叙伝の本質を捉えるミッシュのこうした見方の背景には、自叙伝をめぐるディルタイの晩年の思想がある。ある個人の人生を「理解」する主体と「理解」される客体の一致に生を省察する最も直接的表現として自叙伝をディルタイが高く評価したように、ミッシュはある個人の人生を描く人物と描かれる人物の一致に自叙伝的著作群を包括する統一的な視点を定める¹⁷）。*Autobiographie* という表現はまさにこうした視点を直截に反映する術語なのである。

ところで、*Autobiographie* とよく似た意味に使われる、フランス語起源の *mémoire*（回想録）やラテン語に由来する *commentarii*（備忘録）という言葉がある。とりわけ *mémoire* という言葉は、19世紀に *Autobiographie* という表現によって押しのけられるまで、自叙伝的文書を表わす用語として広く使われていたらしい。しかし、ミッシュは *mémoire* と *Autobiographie* という二つの言葉の間には根本的な差異があることを指摘する。ミッシュによると、*mémoire* という語は、本来、特定の規則に縛られないゆえに無形態であり、だから文学であることを一切要求しない文書群を表わしていた。たとえば、純然たる事実内容を伝える記録や、学者や協会による公的な報告書の表題などに使われ、将来の文学作品、研究調査、歴史研究などへの素材を提供する原資料でしかなかった¹⁸）。つまり、*mémoire* という語は、特定の文学形態に属さず、文学であることを求めないということを表わしているに過ぎなかったのである。それに対し、*Autobiographie* という表現において重点が置かれるのは、作品において描き出される人物がその作品の著者自身であるという点である。つまり、叙述される対象と叙述する主体の一致、この点に自叙伝的文書の本質

を見るミッシュにとって、Autobiographie という言葉こそこの本質の最も端的な表現だったのである。

4. 『自叙伝の歴史』構想の意図

ミッシュが自叙伝の研究に人生の大半を捧げたのは、自叙伝の研究が精神諸科学において特異な地歩を占めるという信念をディルタイと共有していたからである。ミッシュにとって、自叙伝は伝記という文学ジャンルに從属するその特殊な形態でもなければ、文学の一ジャンルの変遷史として自叙伝の歴史を構想したわけでもない。ディルタイと同じように、ミッシュにとっても哲学的、学問的探求の向かう究極の課題は、人間に固有な生の理解、この生を根底に持つ人間の精神的世界の解明であった。こうした探求にはもちろん哲学、宗教、芸術などが深く関わるが、自叙伝研究もやはりそれらに伍してこの課題の究明の一翼を担うのである¹⁹⁾。ディルタイが自叙伝に格別高い評価を与えたように、ミッシュもまた自叙伝研究に並外れて重要な意義を付与する。自叙伝研究のこうした高い位置づけは、自叙伝と生との間の特別な近しさ、つまり、生を生きた本人がその同じ生の解釈者であるという点にある。生を描かれる人間とその生を描く人間の一致、ミッシュが繰り返し強調する自叙伝のこの特殊性こそ、種々雑多な自叙伝的文書を一つのまとまりある考察対象とするのと同時に、精神諸科学において自叙伝研究に比類のない優先的地位を与える根拠ともなっている²⁰⁾。これを要するに、自叙伝の研究は哲学的営為のかたわらでつましく行なわれる特殊な文学領域の専門的研究なのではなく、それはミッシュにとってディルタイの生の哲学を継承し発展させる哲学的探究そのものだったのである。

ミッシュの『自叙伝の歴史』の根底にあって、その研究の理論的前提に基本的な枠組み

を与えたのは、このようにディルタイの哲学であった。ところで、先述したように、ディルタイにとって、自叙伝は「生の諸範疇」を導き出すための格好の素材にとどまり、自叙伝の研究をそれから先へと推し進めることはなかった。しかし、こうした「生の諸範疇」は歴史の彼方にある無時間的な概念ではなく、それ自体、生の流れと同様、歴史の経過とともに時には継承され、時には変化するものではないか。ミッシュが着目するのは、「生の諸範疇」のこうした時代に制約された歴史性である。自叙伝的文書は一見すると歴史のある時代に忽然と出現するがいったん姿を消し、別の時代に異なった形態で出現する。そこには何の脈絡もないかのように見える。このような自叙伝的文書を列挙し羅列するだけにとどまるなら、自叙伝の歴史は物珍しい人間ドキュメントを無作為に並べた歴史のギャラリーになってしまう。しかし、歴史の中で偶然現われては消える自叙伝的文書の証言に耳を傾けるうちに、我々の前には「生の諸範疇」の歴史の変遷が立ち現われてくる。この変遷に着目するなら、脈絡がないかに見える自叙伝的文書を一つの連関へと結びつけ、これら雑多な文書群をまとまりある統一性と把握させてくれる視点が生まれる²¹⁾。かくして、自叙伝的文書と「生の諸範疇」の歴史性に目を向けることにより、自叙伝をめぐるディルタイの思想は、ミッシュにおいて自叙伝の歴史的研究へと展開していくことになる。

ところで、自叙伝は人間の心の奥底に潜む自意識の表出として生まれる。だから、自叙伝の研究はそれを生み出す心的根源、このえたいの知れない自意識へと迫っていかねばならない。ミッシュ自身の言葉によれば、「自叙伝の歴史は、ある意味で、自意識の歴史でもある」²²⁾。この自意識が成立する場であり、その恒常的な担い手となるのは「人格」(Persönlichkeit)である。自叙伝は自意識

の発露であると同時に、また「人格意識」(Persönlichkeitsbewußtsein)の表出でもある。とするなら、自叙伝の歴史は自意識の歴史でもあれば、「人格意識」の歴史ともなる。こうして、ミッシュの関心は、ヨーロッパにおける「人格意識」の問題へと収斂していく。もとより、その「人格意識」は周囲の世界から隔絶されて単独で存在するはずはなく、その担い手を取り巻く社会的、文化的、歴史的な環境の中で形成される。ミッシュにとって自叙伝はヨーロッパ的人間における「人格意識」の発展に関する証言であり、その「人格意識」はヨーロッパ文化における人間精神の歴史と、さらには、ヨーロッパを取り巻く周囲の世界の歴史との脈絡の中で把握されることにより、その発展過程が跡づけられる。したがって、ミッシュの『自叙伝の歴史』は、古代オリエントやイスラーム世界を背景に取り込みながら、ヨーロッパ文化における「人格意識」の発展の歴史として構想される²³⁾。

5. 自叙伝分析の方法

ディルタイは自叙伝から「生の諸範疇」を導き出すとともに、こうして抽出された「生の諸範疇」を相互に組み合わせることによって個々の自叙伝の分析を行なった。しかし、「生の諸範疇」が歴史の中で変化し自叙伝的諸文書に多種多様なかたちで客観化されるのであれば、無時間的に設定された「生の諸範疇」を用いて自叙伝を分析する手法はもはや通用しない。それでは、ミッシュはいかなる方法で自叙伝を分析するのか。

ミッシュが着目するのは、自叙伝の持つスタイル(Stil)である。このスタイルという言葉、ミッシュは内部形態(innere Form)とも呼ぶ。自叙伝の文書は歴史上さまざま文学形態、たとえば、抒情詩、弁論、懺悔録、書簡、小説などの形態を纏って現われた。こうした外的な形態に対して、作品内部に見られ

るさまざまな要素の独自の組み合わせがミッシュの言うスタイルなのである。ミッシュがその要素として挙げるのは、自叙伝の作者が自分の人生をまとまりある全体として把握する方法、叙述の構造、題材の選択、何が重要でありそうでないかを量る比重配分の仕方などである²⁴⁾。これらの結合がスタイルであり、このスタイルから生まれるのが作品の精神である。

記憶違いによって作品の中で語られる一つ一つの事実には誤りがあったとしても、あるいは、狡猾な嘘つきが故意に事実を捏造したり粉飾したとしても、スタイルそのものは偽りなき真正さを失うことはない。事実の細部に誤りがあっても、スタイルにおいて重要なのは事実と事実を結びつける視点なのであり、虚偽によって世間を欺こうとしても、その欺き方によって欺く者の精神のありようをむしろ露わにしてしまうのである²⁵⁾。ミッシュは『自叙伝の歴史』を「人格意識」の発展の歴史として構想したが、その「人格」はスタイルのうちに垣間見られる。いわば、スタイルは「人格」構造の具現化であり、ミッシュはスタイルを「人格」構造を客観的に把握しうるその似姿(Abbild)と表現している²⁶⁾。

ミッシュの『自叙伝の歴史』はディルタイの思想を受け継ぎ、そこから多くの着想を得た。しかし、ディルタイが自叙伝分析に用いた諸概念の歴史性に目を向けたとき、ミッシュはディルタイと袂を分ち、自叙伝に関するディルタイの思想を自叙伝の歴史的研究へと転換させた。その歴史的研究でミッシュの着眼点は、ヨーロッパにおける「人格意識」の発展史へと収斂していく。その研究の際にミッシュが用いるのは、ミッシュ独自のスタイルという自叙伝の内部構造の分析法である。この分析法によって、ヨーロッパにおける「人格意識」の発展史としての自叙伝の歴史はどのように描き出されるのか。その全貌を明らかにするのは今後の課題としたい。

我々はミッシュの記念碑的大著の入り口の前に立ったばかりである。

註

- 1) ウィリアム・C・スペンジマン『自伝のかたち 一文学ジャンル史における出来事』船倉正憲訳 法政大学出版局、1991年、220頁。
- 2) W. Dilthey, *Plan der Fortsetzung zum Aufbau der geschichtlichen Welt in den Geisteswissenschaften*. In: Wilhelm Diltheys Gesammelte Schriften, Bd. VII, hrsg.von B.Groethuysen, Stuttgart, 1958, S.200.
- 3) 拙稿「デイルタイと自叙伝」『筑波学院大学紀要』第3集 2008年、141-148頁。
- 4) Dilthey, op.cit.,S.198.
- 5) *ibid.*,S.192.
- 6) *ibid.*,S.233.
- 7) *ibid.*,S.233.
- 8) *ibid.*,S.236.
- 9) *ibid.*,S.241-242.
- 10) *ibid.*,S.244-245.
- 11) *ibid.*,S.198.
- 12) *ibid.*,S.198-199.
- 13) *ibid.*,S.199.
- 14) フィリップ・ルジュンヌ『自伝契約』花輪光他訳 水声社、1993年、16頁。
- 15) G. Misch, *Geschichte der Autobiographie*, Bd.1/1, Das Altertum, Frankfurt. a. M., 1949, S.8.
- 16) *ibid.*,S.8.
- 17) *ibid.*,S.9.
- 18) *ibid.*,S.8-9.
- 19) *ibid.*,S.10.
- 20) *ibid.*,S.9.
- 21) *ibid.*,S.16.
- 22) *ibid.*,S.11.
- 23) *ibid.*,S.5-6.
- 24) *ibid.*,S.13.
- 25) *ibid.*,S.13.
- 26) *ibid.*,S.16.